東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

荒井正剛・小林春夫編著：『イスラーム／ムスリムをどう教えるか：ステレオタイプからの脱却を目指す異文化理解』（書評）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池,俊介 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166777

書評

荒井正剛・小林春夫編著：『イスラーム／ムスリムをどう教えるかーステレオタイプからの脱却を目指す異文化理解ー』明石書店，2020，204ｐ．2,530 円

評者が学生時代に感銘を受けた本の一つに大野盛男著『フィールドワークの思想』がある．イランにおける農村調査を事例に，本格的なフィールドワーク論が展開された名著であるが，その本の中で「旅行者としてせいぜい砂漠らしきものを遠くから眺めたほんの小さな体験を前提として，乾燥，遊牧，イスラムといった概念をそれらの間の因果関係を現実の場において検証することなく，三題噺的につなぎあわせてことたれりとする風土論が横行している」ことを大野氏は嘆いている．この本は 1974 年に刊行されたものだが，50 年近く経った今も，こうしたステレオタイプが蔓延る状況は大きく変化していないように評者には思われる．地理教育に携わる者として，責任の一端を感じざるを得ない．

言うまでもなく，地理教育は世界の多様性を理解し的確な世界像を形成する上で不可欠な存在であるが，逆にステレオタイプ的な地域像の形成を助長してきた側面があることも残念ながら否定できない．例えば，地理授業では第三世界の国・地域の事例を取り上げるが，それぞれの地域で発生している「問題」を積極的に取り上げることが，逆に「貧しさ」や「遅れ」といったマイナスのイメージを生徒に定着させてしまっているという指摘もある．

同様のことはイスラームについても当てはまる．イスラーム過激派によるテロ等の影響により，イスラームに対して「異質，怖い，扱いにくい」といった偏見や思い込みが広がるなか，学校教育とくに地理教育がそうしたイスラームに対する誤ったイメージの形成を助長してきた面もあるのではないか．そうした問題に多彩な授業実践を通じて真正面から取組んだのが本書である．

本書は，編者である荒井正剛氏（地理教育論）と小林春夫氏（イスラーム思想史）の呼びかけで 2015 年度に立ち上げられた東京学芸大学特別開発研究プロジェクトの 4 年間の研究成果をまとめたものである．執筆者は，東京学芸大学の研究者 4 名と，附属中学校・高校等の教員 10 名であるが，専門研究者・教科教育学者・学校教員による共同実践研究をまとめた本書は，まさに「理論と実践の往還」を実現した貴重な研究成果であると言える．

本書の構成は 3 部からなる．まず第 I 部（第 1・2 章）では，イスラームに関する社会科授業の課題や，生徒のイスラームに関する知識・意識の実態，教科書記述の課題等が論じられている．例えば，イスラームに関する知識・意識の実態については，キリスト教・仏教に比べて「教えを厳格に守る」「宗教独特の習慣」「信者による事件や犯罪」「不自由」「砂漠の宗教」といった否定的なイメージを持つ中・高校生が多いことがアンケート調査から明らかにされている．また，大学生を対象としたアンケート調査でも，「断食する月がある」「1 日数回礼拝する」「欧米には信者はほとんどいない」「豚肉を食べない」と回答する学生が多く，イスラームに対する誤解や偏った知識内容が多い．筆者らがそれらの原因の 1 つとして注目

するのが，小・中・高校の教科書記述である．教科書にはイスラームに対する否定的イメージに沿った記述が多くみられ，知識が増えるほど，かえって否定的なイメージが助長される懸念さえある，というショッキングな指摘もなされている．

本書の中核をなす第Ⅱ部は，イスラームをテーマとした授業実践から構成される．第4章から第11章まで全部で8つの授業実践が紹介されているが，中学校地理的分野（2件），歴史的分野（2件），公民的分野（1件），高校地理（1件），高校世界史（1件），高校科目間連携（1件）と内容は実に多彩である．

例えば，中学校地理的分野における実践である第4章「ムスリムの思いを通して寛容的な態度を育む授業」（1年生）は，「世界各地の人々の生活と環境」の単元の授業である．マクドナルドのインドネシアの店舗の写真を生徒に見せ，「なぜ世界には昼間に営業しないマクドナルドがあるのだろうか」と問いかけることから授業は始まる．これはラマダーン（断食月）によるものだが，こうした導入によりイスラームへの興味・関心を喚起し，その後，日常生活（礼拝，食の禁忌，喜捨，女性の服装，断食など）や世界におけるムスリムの分布について学習して行く．とくに重要と思われるのは，「ムスリムの思い」を生徒に理解してもらうためにムスリムの人たちの思いが表現された文章・動画を活用している点である．これが生徒のムスリムに対するイメージ・知識の変化に大きな影響を与え，イスラームに対する寛容的な態度の育成につながったことが，本章では具体的に示されている．

興味深いのは，授業者の篠塚昭司氏が「ムスリムの話を聞く動画の効果がある意味では大きすぎた」と指摘している点である．すなわち，動画の影響が生徒たちを逆に誤った理解に導いてしまう危険性を指摘しており，資料の活用の仕方について改めて考えさせられる．なお，こうした動画の影響力に着目した篠塚氏は，第7章の歴史的分野の授業「マス・メディアの情報を批判的に考察する歴史授業」でディズニー映画「アラジン」等を活用した実践も行っている．こうした分野を超えた重層的な試みが見られるのも，同じテーマで多分野にわたる授業実践をまとめた本書の特徴と言えるだろう．

また，第11章では「イスラームとの共生」を主題として，高校では珍しい「地理 A」「世界史A」「現代社会」「倫理」が連携した科目横断的な実践が紹介されている．ここでは，「イスラーム検定をつくろう」というユニークな試みも実践されており，学習の振返りに役立てられている．

最後の第Ⅲ部では，社会科教育学の立場から，第Ⅱ部で紹介された授業実践の評価が行われている．歴史教育の立場からは，認識面からイスラームに対する偏見の克服を試みたものとして諸実践を評価する一方で，「何を知っているか」ではなく，「知り方とくみたて方」への着目が必要との重要な指摘がなされる．また，地理教育の立場からは，ムスリムの留学生から話を直接聞くなどの「対話」の重要性や，典型的な事例を通して考察することの盲点などが指摘され，本書全体の優れた総括となっている．

また，本書には6つのコラムが設けられ，諸外国のムスリムの日常生活の実態が各執筆者の体験を踏まえて描かれており，授業に活かせる資料が豊富に提供されている．

地理学習における「生活・文化」の学習は情報

が限られ，パターン化等の問題がしばしば指摘されてきたが，本書はそうした生活・文化に関する学習のあり方を問う好書である．ぜひご一読をお薦めしたい．

（池　俊介：院 17 期　早稲田大学）